

《ドイツレクイエム》考—レクイエムの母語化に宿るドイツ観—

On the “Ein deutsches Requiem”; Brahms’s thought on Germany
delivering requiem with the mother tongue

藤田 紫

Yukari Fujita

2012年の秋、私はブラームスのドイツレクイエムの合唱に参加した。当初、ブラームスの《ドイツレクイエム》という曲名に、私にとっては、馴染みの薄さと若干の新鮮味を覚えながらの取り組みであったが、やがて、なぜレクイエムがドイツ語で歌われるのだろうか、との疑問が膨れ上がってきた。レクイエムはキリスト教世界観の表出であり、カトリックのミサ曲である。一方、宗教改革者であるルターが行為としてのミサを軽視した経緯から、プロテスタントの教会において典礼ミサは否定された存在であった。ブラームスは、ハンブルク出身のプロテスタント信者である。それにも関わらず、レクイエムの創作に挑んだ。しかもドイツ語で。そして、形の定まっているレクイエムの形式には則らずに、ルター訳の新旧訳聖書、聖典外から、自身の思想に基づいたテキストを選び出し、《ドイツレクイエム》として仕上げた。このレクイエムの創作については、母の死、およびブラームスを音楽家として見出したシューマンへの追想との関連性が高い、と多くの文献で述べられている¹。一方で、なぜブラームスがドイツ語でレクイエムを創作したのかについては、多くの議論がなされていない。ブラームスは、《ドイツレクイエム》のタイトルである「ドイツ(deutsch)という語は、人類(Menschen)という語に置き換えてよい」²と述べたことから、ドイツ・ナショナリズムとは無関係との考え³が多い。これに対して、ベラー＝マッケンナは、タイトルの deutsch は、カトリックのオーストリアに対して、プロテスタントの北ドイツを表す政治性の現れであるとの見解を示している。しかし、なぜドイツ語のレクイエムなのかについては、言及していない⁴。

ブラームスの生きた 19 世紀において、ラテン語は、宗教的、および社会的にも権威のある言語として存在していた。このようなラテン語が司るレクイエムに対し、ブラームスは、慣例に縛られることなく独自のレクイエム像を抱き、それを体現した。このように、権威に臆さず独自性を打ち出した行為は、19 世紀中葉にあつて非常に大きなエネルギーを持った思想を必要とし、確固たる独自性の主張に裏打ちさ